

巻 頭 言

非日常ということだと思うこと

総合情報処理センター長 深瀬 政秋

総情センターのスタッフは他大学と較べて明らかに少ない上に、5年ほど前から専任でもなくなった。そのことと関係しているのか、1, 2年毎の事務系の交替時に職掌という言葉は何度か聞いた。勿論これは線引きが目的ではなく、実際は云う方も聞く方も阿吽の呼吸を働かせ、拡大適用されてきたものであるが、翻って「総情センター」の「職掌」である。探せば設置目的あたりに記載はあるだろうが、それが現状に沿うはずがない。ここらできちんとする必要があるのではないか、改革や計画もそれがあってのことであろう、などと密かに思っていた。必要に応じて、(1) 弘前大学の情報基盤の効率的な運用と保守整備、(2) 情報基盤に関わる弘前大学の教育と研究のサポート、及び学術情報処理、事務処理のサポート、(3) (1), (2) に関わる研究開発、と考えることにしてきた。これで、総情センターがリテラシー教育の末端を担っていることもカバーされる。しかし、実はこれだけでは足りない。

どうしても、総情センターは情報パラダイム、モラル、ポリシー、情報・ソフトウェア・コンテンツ対法律、情報セキュリティなどのIO (information officer) と結び付けられがちである。この辺りの是非、守備範囲、対応可能性などについては、総情センターが関係する会議でも時々話題になっていた。大震災後は非日常のICT対策が加わった。東北のカタストロフィを、全国レベルの学会では非日常として一般化し、通信系の輻輳や基地局の電源確保などに話を広げている。弘前も直接の被害はなかったと云えるが、停電という同じ条件下で、総情センターのスタッフは極めてよく対応した。大震災時の総情センターの対応は、平成23年9月15日(木)に三重大学で開かれた第6回国立大学法人情報系センター研究交流・連絡会議で、専任教員の佐藤先生が震災事例紹介として取りまとめている。

それにしても、昨年春の2度にわたる停電でネットワークの復旧が一番早かったにもかかわらず多少の苦情はあったらしいし、自家発電の騒音という想定外の苦情もあった。総情センターとしても、非日常時の対応マニュアルは必要である。しかし、もっと重要なのは非日常で弱った時の攻撃である。暗号、計算機やインターネットのみならず、情報という用語さえも戦争、軍隊と密接に関係していることは折に触れ言及してきたが、テレビドラマの坂の上の雲で時折軍艦マーチが流れるのを聞いて思いを新たにすることがある。その歌詞にある通り、守るが先で攻めるは後で、防備や兵站線の確保は地味だが戦略の要である。

総情センターにとって守るべきはセキュリティであるが、トラブル惹起は非日常に限らない。自ら招いてしまう恐れもある。いい例が、世界に向けて発信するには開放が必要で、開けば侵入されるということである。ICTの技術革新は日進月歩などという曖昧なものではなく、業界の明確な意思、即ちグローバルスタンダードで律速されるから、古い機器を使えば良いという精神論もICTに関する危機管理の観点からは迷惑である。脆弱さは言い訳にはならず、総情センターとしては法人化後の大学全体の予算状況と、コストパフォーマンスの最適解を常に意識する必要がある。